

中国農村における留守児童の夢と社会的支援に関する一考察 ——フィールドワーク2年目の総括——

登坂 学

Consideration of Social Support and Dreams of Left-Behind Children in Chinese Agricultural Villages: Summary of Fieldwork of Two Years

Manabu TOSAKA

Abstract

This paper examines and elucidates how the ambitions of left-behind children in poor agricultural villages can be fulfilled in Chinese society. The following chapter (Chapter 2) verifies important government documents and considers the effect of Chinese educational reforms on the self-actualization of left-behind children and children of migrant workers over the next decade. Chapter 3 examines the state of living and the “dreams” of left-behind children from the children’s perspective on the basis of a survey conducted in an agricultural village in Hunan Province, which has been the focus of participant observation for two years. Chapter 4 introduces and considers the significance of the implementation of social care, which is based on the survey results of economically developed coastal cities, to help the children in these cities realize their dreams, as these are areas which host migrant workers and their children.

Key words : harmonious society, left-behind children, migrant worker, Hunan Province.

Zhejiang Province, participant observation

キーワード : 和諧社会 留守児童 外来建設者 湖南省 浙江省 参与観察

2011.11.24 受理

1. はじめに

前稿¹⁾までに論述してきたように、中国政府は「和諧社会」の実現に向けて「教育格差縮小」を目標に教育行政を推進している。その方針に呼応して、社会に外来建設者の子どもを手厚く教育・監護すべきであるという雰囲気醸成されている。子どもはみな自分の夢を持っている。それは都市居住者・農村居住者を問わないし、貧富の格差も関係ない。次代を担う子どもの純粋な想いを尊重し、その最善の利益を守り実現することこそ、政治体制にかかわりなく、政府が考えなくてはならない普遍的事項である。本稿が一貫して注目するのは「子どもの夢」である。

さて、前稿冒頭で、筆者は「^{チーホエイニョーハイ}智慧女孩」というシンガー²⁾の歌う「留守的孩子」という曲の歌詞を紹介した。ここでもう一曲、留守児童にかかわる彼女の楽曲を掲載しよう。³⁾

爸爸在家里，种地是好手
(わたしのパパ お家では 腕利きのお百姓さん)
进城去打工，专门盖大楼。
(でもね街で働くときはね 高層ビルを建ててるんだよ)
爸爸盖的楼，高过后山头
(パパが建てたビルは 裏山のとっぺんより高いのよ)
站在楼顶上，能见小妞妞。
(ビルの屋上に立てば わたしが見えるでしょ)

春过又到秋，爸爸走得久
 （春が来て また秋になったけど パパは行ったきり）
 姐姐想爸爸，想得泪水流。
 （わたし パパを想って泣いちゃった）
 爸爸爸爸好爸爸
 （パパ パパ やさしいパパ）
 什么时候带我走
 （いつわたしを 連れて行ってくれるの）
 姐姐要看城里的灯
 （わたし 街の灯りを 見てみたい）
 姐姐要看你盖的楼。
 （わたし とうさんの建てたビルを 見てみたい）

「我的爸爸会盖楼」(わたしのパパ、ビルを建ててるの)と題するこの歌で表現されているのは、父親に会えない寂しさや心情であると同時に、父親の仕事に向けられた敬愛の眼差しである。更に父親が建設した高層ビルをこの目で見てみたいという想い、街で一緒に暮らしたいという当然の気持ちを感じ取ることができるだろう。このような留守児童の純粋な願いを、中国社会はどのように受け止めようとしているのだろうか。

「児童の権利に関する条約」第18条は次のように規定する。⁴⁾

1 締約国は、児童の養育及び発達について父母が共同の責任を有するという原則についての認識を確保するために最善の努力を払う。父母又は場合により法定保護者は、児童の養育及び発達についての第一義的な責任を有する。児童の最善の利益は、これらの者の基本的な関心事項となるものとする。

2 締約国は、この条約に定める権利を保障し及び促進するため、父母及び法定保護者が児童の養育についての責任を遂行するに当たりこれらの者に対して適当な援助を与えるものとし、また、児童の養護のための施設、設備及び役務の提供の発展を確保する。

3 締約国は、父母が働いている児童が利用する資格を有する児童の養護のための役務の提供及び設備からその児童が便益を受ける権利を有することを確保するためのすべての適当な措置をとる。

これこそ、まさに留守児童の願いを汲み取り、事態を改善するための指針となるものである。子どもの権利条

約の精神及び理念を、中国はどのように政策に反映し、実践に取り組み、達成しようとしているのであろうか。

以上の問いを明らかにすべく、小論ではまず次節（第2節）において、今後10年間の中国教育の改革動向が留守児童と外来建設者にとってどのような意味を持つのか、昨年発表された政府の重要文書を検証するなかから考察する。果たして政府の教育政策は留守児童の夢の実現に寄り添おうとしているのだろうか。続く第3節では、湖南省農村で過去2回にわたり継続している参与観察に基づき、貧困農村における農村児童の生活状況と「夢」の諸相を検証する。最後の第4節では、湖南の村人たちが多く出稼ぎに行く浙江省義烏市を事例に、外来建設者およびその子女を受け入れる都市が子どもたちの「夢」実現のためにどのような社会的ケアを実施しているか検証し、その意義を考察する。

2. 教育発展計画からみた外来建設者及び留守児童

2-1 教育事業発展の主要目標

都市と農村の格差は、所得格差として顕著にあらわれ、所得格差は教育格差と密接な関係がある。外来建設者の平均的な学歴が中学卒業程度であることは、前稿までに述べたところである。

ところで、2010年に発布された今後10年にわたる中国教育の青写真ともいえる「国家中長期教育改革と発展計画」の中で、政府は教育格差の是正に言及している。この公文書は明確な具体的数値目標を掲げている点で注目に値する。まずは前稿で言及できなかった本文書の内容を読解し、それが外来建設者および留守児童の問題とどのような関係にあるか考察することとしよう（表1参照）。⁵⁾

まず、「入学前教育」(幼稚園)の入園率をこの10年で20%増加させる目標が注意を引く。農村における留守児童の問題を考えると、幼児期における両親の不在が子どもに与える影響は無視できないものがあると認識されている。両親の出稼ぎに伴う家庭教育の機能低下を補うためにも、この目標数値は重要であろう。

次に、「九年制義務教育」にかんしては、この先10年における定着率の増加は5%足らずとなっている。これは義務教育が普及を達成しているとみなされていることと関係あろうが、辺境や少数民族居住地域それに都市部の貧困層等、いわゆる「弱勢群体」中になお存在する深刻な「失学」問題の解決をターゲットに、さらなる定着率の向上を目指そうとするのである。

これに対して、「高校教育の入学率」は10%以上の増

表1 教育事業発展の主要目標

指 標	単位	2009年	2015年	2020年
入学前教育 幼稚園在園人数	万人	2,658	3,400	4,000
入学前1年(年長組)入園率	%	74.0	85.0	95.0
入学前2年(年中組)入園率	%	65.0	70.0	80.0
入学前3年(年少組)入園率	%	50.9	60.0	70.0
9年制義務教育 在校生数	万人	15,772	16,100	16,500
定着率	%	90.8	93.0	95.0
高校等教育段階の教育 在校生数	万人	4,624	4,500	4,700
入学率	%	79.2	87.0	90.0
職業教育 中等職業教育在校生数	万人	2,179	2,250	2,350
高等職業教育在校生数	万人	1,280	1,390	1,480
大学教育 在学総規模	万人	2,979	3,350	3,550
在校生数	万人	2,826	3,080	3,300
うち、大学院生	万人	140	170	200
入学率	%	24.2	36.0	40.0
継続教育 社会人の継続教育	(延べ) 万人	16,600	29,000	35,000

加を目標としている。外来建設者をはじめとする労働者層の平均的学歴がなお中学卒程度であることを考えれば、主たる労働力となる層の資質を向上させようという狙いが推測できる。この点では職業教育においても同様であり、在校生数でみると200万人規模の増加を目標としている。

この点では「大学教育」において更に顕著である。今後10年間で入学率を現在の24.2%から倍近い40%に増加させようとしているのである。21世紀における産業の高度化と国際競争力の向上を目指し、高度な人材の育成が急務であるとの認識を示していると考えられる。この狙いは次項の「社会人の継続教育」にも共通するものである。継続教育利用者を述べ人数で現在の1億6千6百万人から3億5千万人に、つまり倍近くに増やそうとしている。日本や欧米諸国と同様の生涯学習型社会を構築しようとしていることがうかがわれる。

2-2 人材開発の主要目標

次に、産業により密着した「人材開発」という観点の指標を検証しよう(資料2参照)。⁶⁾これによれば、大学教育をより重視した方向づけがなされていることが理解できるのである。

表2 人材資源開発の主要目標

指 標	単位	2009年	2015年	2020年
大学教育の教養水準を持つ者の人数	万人	9,830	14,500	19,500
労働年齢人口の平均的教育年数	年	9.5	10.5	11.2
うち、大学教育を受けた者の割合	%	9.9	15.0	20.0
新たに増加した労働力の平均的教育年数	年	12.4	13.3	13.5
うち、高校教育以上を受けた者の割合	%	67.0	87.2	90.0

第一に、「大学教育の教育水準を持つ者の人数」であるが、この10年間で9,830万人から約2倍の1億9,500万人へ増加させることを目標としている。つまり中国総人口の1割以上を大学卒業レベルの人材にしようという計画である。

第二に、労働年齢人口の平均的教育年数をみると、現在の9.5年(これは9年制義務教育終了、つまり中卒レベルとほぼ合致する)から、高卒レベルに近い11.2年に延長しようとの目標である。そのうち大卒レベルの者の割合を20%に増加させようとしている。中国における「労働年齢人口」は我が国の「生産年齢人口」に相当し、15歳以上65歳未満のことをいうのであり、ここから全国的・世代縦断的な学歴・教養レベルの底上げを図ろうとの狙いであることが理解できる。

要するに本発展計画からは、現代型の生産・サービスの現場において実戦力となりうる高い資質を備えた人材を格差なく平等に養成せんとする国策を汲み取ることができるのである。では、当の留守児童は自己の将来にどのような夢を抱いているのだろうか。次節で検証していこう。

3 留守児童の夢——湖南省X県の山岳部小学校におけるアンケート調査より

3-1 第2次農村調査

2010年12月24日～2011年1月7日にかけて、筆者は中国農村における2回目のフィールドワークを実施した。調査地は前回同様、湖南省X県Z村である。前回調査から1年が経過し、ホームステイ先の主(F氏=研究協力者)や家族、地域の間人間関係にもいくつかの変化が生じていた。まず四十路前半の研究協力者が「おじいち

ちゃん」になったことである。F氏宅に同居する娘夫婦に長女が誕生したのだ。(図1参照)家の中がパッと明るくなったようで、とても賑やかで笑い声が絶えなかった。家族の注意はすべて愛娘に注がれるようになった。筆者ですら滞在中はずっとこの子と遊んだりあやしたりしていたのである。さらに若夫婦に子どもが生まれてからというもの、F氏は儉約を心がけ、近隣住民とのトランプ等交遊も控え、「良いおじいちゃん」になっていた。このようにフィールドワークを通じて農村に住む人たちの生活と人生に多少なりとも向き合うと、政府文書やオフィシャルなデータ、あるいは新聞・雑誌の報道に基づいて「中国農民は〇〇である」と一括りに論ずる発話の位置とその単純さと危険性に思い至るのである。この点は自戒しなければならない。



図1 パパに抱かれたF氏のお孫さん

さて、今次調査の目的は、前回お世話になった調査地(湖南省X県Z村)における研究協力者やその人的ネットワークを頼り、留守児童の生活世界や内面世界を把握することであった。(その手続き的経緯は前稿を参照のこと)その方法は主にアンケート及び聞き取り調査であり、対象は湖南省X県Z村近隣の山岳農村にある幼稚園・小学校併設校及び町のほぼ中心地にある「鎮中心小学」であった。

前者はF氏がバイクで筆者を帯同のうえ直接訪問して校長先生に依頼してくれた。本校は山岳地の極めて小規模な幼・小併設校であり、小学校部には1~2年生が在籍するのみであった。まだ幼い子どもたちが自力で文章を理解し回答するのが難しかったため、校長先生の協力のもと、対面聞き取り方式で記入していった。

また後者にあつては、当該小学校で教鞭をとるF氏の親戚の女性教員の協力のもと、4年生を中心に実施した。この女性教員はわざわざ自分の受け持ちの授業時間やその他の課外時間を割いて子どもたちに質問票の説明およ

び記入を実施してくれるなど多大な便宜を図ってくれたのである。一外国人が中国国内においてこの種の調査を行うことは容易ではない。反面、個人的な人脈や繋がりを頼ることであけなく実現することもある。今回の調査はまさにF氏の人徳とネットワークのおかげで実現したものである。

そこで、まず小論では14人という少数サンプルの前者(山岳僻地にある幼稚園・小学校併設校)で行った調査結果を公開することとし、サンプル数が80人を超える後者(鎮中心小学)における調査結果については稿を改めて紹介する。その理由は、①一言で貧困農村といえども格差が存在すること、つまり山岳僻地と鎮(第三次産業が集まる市街地)は明らかに異なる経済条件下にあること、②鎮中心小学における調査対象が高学年であることによる。つまり「山岳僻地」と「市街地」、「低学年」と「高学年」という、中国農村を記述するうえで重要な比較軸が生じるため、新たに稿を起こして論じる必要があるためである。

3-2 質問項目

質問項目は図2のとおりである。(紙幅の関係で和訳のみ掲載する)

図2

農村小学生に対する質問票調査

このたびの質問票調査はすべて匿名回答とし、知りえた内容は学術論文の執筆に使用するのみであり、絶対にその他の目的に使用しないことを、私(登坂学)はここに宣誓いたします。

※ 〇内には✓印を、()内には語句の記入をお願いします。

- 1 あなたは 男子 女子
- 2 あなたは何歳ですか? () 歳
- 3 あなたは何年生ですか? () 年生
- 4 あなたは何人家族ですか () 人家族
- 5 兄弟姉妹は何人いますか? () 人
- 6 あなたの家族構成は?
() () () () ()
- 7 今年あなたのお父さんやお母さんは出稼ぎに行きましたか?
 二人とも出た。
 お父さんが出た。
 お母さんが出た。
 出ていない。二人とも家にいる。
- 8 お父さんやお母さんが出稼ぎに行くと、何カ月(何年)に一度帰省しますか?

- () ヲ月に一度帰省する。
 () 年に一度帰省する。
- 9 お父さんやお母さんが出稼ぎで家にいないとき、誰があなたの面倒を見てくれますか？
 おじいちゃん おばあちゃん
 父方の伯母さん 父方の叔母さん
 母方の伯父(叔父)の妻 お兄さん
 お姉さん その他()
- 10 お父さんやお母さんがいないとき、あなたは寂しいですか？
 とても寂しい 時々寂しい
 寂しくない、慣れた 全然寂しくない
 その他()
- 11 あなたはどの程度の学歴を希望しますか？
 中学校 高校 大学
 大学院修士 大学院博士
- 12 あなたの家の経済状況はどうですか？
 とてもよい どちらかといえばよい
 ふつう どちらかといえば困難
 とても困難
- 13 現在あなたの学業成績はどうですか？
 とてもよい どちらかといえばよい
 ふつう どちらかといえば悪い
 とても悪い
- 14 学校の授業についていけますか？
 ついていけない
 (どんな点で？：)
 ついていける
- 15 将来あなたはどんな仕事に就きたいですか？それはなぜですか？
 (職業：)
 (理由：)
- 16 余暇時間は何をしておすごしていますか？
 ()
- 17 学校や地方政府が留守児童に対して何か特別な措置をとってくれるよう希望しますか？
 必要(どんな措置？：)
 必要なし

ありがとうございました。

3-3 アンケート結果——山岳農村における留守児童の生活状況と夢

当該校(D小学)は幼稚園部と小学校部が併設されている複合校であり、小学生部においては主に1年生と2年生を同一教室で教える複合学級である。またこの小学

校はいわゆる「完小」(＝完全小学)ではない。「完小」とは、在校生の人数が多く、事務・運営部門が完備し、在学状況の記録が充実した学校で、1～6年生まで一貫して教育し、卒業証書を発行することのできる小学校のことをいう。「完小」でない小学校がある理由としては、地理的要因、教育経費の問題、教員の資質の問題、就学児童数の問題等様々な問題が存在する。)山地に住む家庭の子どもたちは2～3年生までここで授業を受け、3～4年生からは山を下り、平地の学校に通うことになる。そこでは親戚の家にお世話になったり、学校内の寄宿舎に住み込んだりして勉学を続けるのである。

D小学の子どもたちは小学校低学年でまだ幼く、自力で質問票へ記入することが困難な子どもが多くいたため、筆者および校長先生による個別の説明と指示の下での実施となった。このような方法をとる場合、その場を管理する受け入れ側の面子や意向が調査結果に多少なりとも反映することが考えられる。そのため調査としての厳密性や客観性には多々問題があることは承知している。しかし、①そもそも外国人がこの種の調査を実施すること困難である点において、また②農村貧困地域の子どものたちが将来にどのような夢を持っているか把握するという本調査の主要目的の点において、一定の意義は存在すると考える。

当日、小学生部の出席者は19人であったが、回収サンプル数は14、回収率は73.7%であった。これは筆者および教員の説明・指導の目配りが行き届かず記入が困難であったり、インタビューおよび記述中に外に遊びに出てしまう子どもがいたりしたためである。

それでは結果を見ていこう。(本来は結果とコメントを別個に記述すべきであるが、紙幅の関係で本稿では併記することをご了承いただきたい)

質問1は性別を問うものである。男子7人、女子7人であった。つまり回答者は男女同数であった。

質問2は年齢を問うものである。6歳が4人、7歳が10人であった。

質問3は学年を問うものである。1年生が4人、2年生が10人であった。年齢および学年は6歳が1年生で4人、7歳が2年生で10人であった。1年生にとってこの質問票に回答するのは難しかったかもしれない。

質問4は家族の人数を問うものである。3人家族が1人、4人家族が0人、5人家族が7人、6人家族が4人、7人家族が2人であった。家族の人数を正しく把握していないケースが見られた。また、ふだん外出がちで他地域に住んでいる兄弟姉妹をどう扱うか混乱しているケースがみられた。この点は筆者の反省点である。

質問5は兄弟姉妹の人数（本人を含め）を問うものである。1人っ子が6人、2人兄弟が3人、3人兄弟が5人であった。予想に反して、一人っ子の割合が大きかった。「予想に反して」というのは、これまでのフィールドワークにより、農村部においては計画生育（一人っ子政策）が必ずしも厳格に守られておらず、2～3人の子どもがいる現状をこれまで見聞してきたからである。ただし回答欄を見ると——次の質問事項と比較すると明白なのだが——兄弟姉妹のいずれかを書いて、抹消・修正した形跡のあるサンプルが複数みられるのである。可能性としては、その場を仕切る校長先生から何らかのチェックが入った可能性も排除できない。農村部において計画生育が形骸化しているとはいえ、（或いはメンツ上）表立って子ども（きょうだい）の数の多さを公表するのが憚られる事情があるからである。

質問6は家族構成を聞くものである。前項・前々項の理由により、これも正確に反映されていない可能性がある。家族構成のパターンをすべて列挙するよりも、ここでは大きく核家族か直系家族かで分類する。核家族が2人、直系家族が12人であった。核家族においては一人っ子が1人、3人きょうだいが1人であった。また直系家族においては、祖父・祖母両方と一緒に暮らす者が10人、祖母と同居するものが2人であった。このことから山岳部農村では圧倒的に直系家族が多く、祖父母と同居している子どもが多いことがわかる。

質問7は本年（2010年）における両親の出稼ぎ状況を聞くものであるが、この項目は実質的に両親の不在状況を把握するためのものである。「両方とも出稼ぎに行った」が10人、「父親が出稼ぎに行った」が4人、「母親が出稼ぎに行った」が0人、「両親とも家にいた」が0人であった。

この結果を見ると、すべての子どもの親が出稼ぎをしていることがわかる。とりわけ両親ともに出稼ぎをした子どもは10人と最多である。つまり、この小学校で学ぶ子どもたちは、そのほとんどすべてが留守児童であると言って差し支えない。これだけ高率なのは山地において農業収入やその他の現金収入の路が極めて限られているためであろう。

質問8は親の里帰りの頻度を聞くものである。この質問項目は、出稼ぎをする親がどのくらいの頻度で里帰りするかを把握しようとするものである。または、両親がどれくらいの期間不在であるかを知るための設問である。「3ヵ月に1回帰省する」が1人、「1年に1回帰省する」が13人であった。一人を除くすべての子どもの親が一年に一度だけ帰ってくる。おそらく中国正月およ

びその前後であろうと推測できる。里帰りの期間は長短あろうが、親子水入らずとなるのは一年のうち、わずかその時期だけなのである。携帯電話など通信手段が普及した今日でも、親が傍らにいない心細さはいかばかりであろうか。

質問9は両親不在時の監護者が誰であるか聞くものである（複数回答あり）。つまり両親が出稼ぎで不在の間、だれが子供の面倒を見てくれているか把握するものである。祖父（父方・母方含む）が11人、祖母（父方・母方含む）が11人、おば（父の姉妹）が0人、おば（母の姉妹）が0人、おば（父の兄の配偶者）が1人、おば（母の兄弟の妻）が0人、兄が1人、姉が0人、その他が1人であった。ほとんどの子どもが祖父あるいは祖母、またはその両方をあげている。ちなみに祖父・祖母両方をあげた者は9人であった。ここから最も近く信頼できる老親に子どもの監護を依頼する傾向がみられる。なお、この設問の選択肢については続柄の設定・記載が中途半端であったことが反省点である。（中国語の親族は細かく区別されて呼称されるため、どこまで掲載するか迷ったのである）「その他」は母親という回答であった。これは父親のみが出稼ぎしている子どもの回答であった。

質問10は両親不在時の留守児童の気持ちを把握する重要な問いである。「とても寂しい」が1人、「時々寂しい」が8人、「あまり寂しくない、慣れた」が3人、「全く寂しくない」が1人、「その他」が1人であった。

「とても寂しい」と「時々寂しい」が9人となり、大多数が親のいない寂しさを感じていることが見てとれる。その反面、「あまり寂しくない」「全く寂しくない」が4人いることに正直驚かされた。推測であるが、調査対象がすべて1・2年生であることを考えれば、日々の勉強や友達との遊びに熱中する中で両親不在の寂しさが解消できているのかもしれない。学年がもう少し上がるとどうなるか、次稿における鎮中心小学の子どもたちのサンプル分析をとおして検証したい。なお、「その他」は無回答である。

質問11は将来の学歴について希望を聞くものである。学業に対する意欲や期待を把握するための設問ともいえる。「中学卒業」が0人、「高校卒業」が0人、「大学卒業」が14人、「大学院修士修了」が0人、「大学院博士修了」が0人であった。14人すべてが大学卒業を希望している。大学といっても、小学1・2年生の幼い子どもたちには、「そこを出れば偉くなれる」程度の漠然としたイメージしかあるまい。しかしながら立身出世の前提となる大学という機関の存在の認知と高学歴志向の兆

しが、山村僻地の子どもたちにすらうかがえるのである。ただ、修士・博士といった学位については、大学本科以上に具体的イメージ困難なものであろう。

質問12は家計の状況を聞くものである。中学、高校、大学と進学して夢を実現するためには相応の学費が必要である。家計の良し悪しは夢を実現するためのメルクマールとなろう。子どもはそれを敏感に感じ取るはずである。親に年収を問えば具体的な数値が把握できるであろう。しかし今回の調査対象は子どもである。家の経済状況に対する子どもの認識を聞くものとどめた。「とてもよい」が0人、「比較的良い」が0人、「普通」が13人、「比較的困難」が1人、「非常に困難」が0人であった。一人を除き、「ふつう」であると回答している。子どもたちの親は出稼ぎをして実家に送金している（外来建設者がどのくらいの収入を得ているかは前稿をご覧ください）。そのありがたさは認識していると思われ、暮らし向きの良し悪しも漠然としながら感じていると思われる。

質問13は現在の成績を問うものである。小学校低学年であろうとも、学習内容を理解し課題をできた喜びは更なる学習のモチベーションに繋がるし、教師や家族、親戚の称賛を得ることによって自己肯定感が形成されていく。「とても良い」が0人、「比較的良い」が2人、「普通」が10人、「比較的悪い」が2人、「非常に悪い」が0人であった。テストの点数を見せてもらうことはできなかったが、「普通」であると認識しているものがほとんどである背景には、少人数ゆえ、先生の指導が行き届くことも関係しているのではない。

質問14は前問に関連し、授業についていくことができるかどうかを問うものである。「有る」が3人、「無い」が9人、「無回答」が2人であった。校長先生の手前、答えにくい設問だったかもしれない。「有る」と答えた子どもは2人が具体的内容欄が無回答であったが、1人が「記憶力が良くない」と記述していた。これは前問にかんし「比較的悪い」と答えていた子どもである。

質問15は将来希望する職業について聞くものである。子どもの夢にかんする、本調査において重要な問いである。なりたい職業の順位と記述された理由を列挙してみよう。

①教師 7人

- ・先生は知識を教えるから
- ・先生は知識を教えることができるから
- ・良い生徒を育てたいから

②医師 3人

③人民解放軍兵士 2人

- ・祖国を防衛したいから

- ・祖国防衛のため

④出稼ぎ 1人

- ・お父さんと一緒にお金を稼ぎたい

⑤善良な人 1人

教師が半数を占めていた。自分たちに常に思いやりを持って優しく厳しく接してくれるもっとも身近な大人である校長先生をはじめとする先生に純粋な憧れを持っていることがわかる。（子どもたちなりに、その場にいた校長先生の面子を立てているのかもしれないが）二位に医師、三位に人民解放軍兵士が入った。いずれも人のため人のため一生懸命に奉仕したいという純粋な気持ちが表れている。4位の「出稼ぎ」というのは農民層の現実路線を反映していよう。同4位の「善良な人」という回答は意外だったがほっとさせられた。

質問16は子どもたちが余暇をどのように過ごしているか把握しようとする設問である（複数回答可）。山岳地の小学校低学年の子どもたちはどのような活動を楽しんでいるのだろうか。

①駆けっこ競争 5人

②子をとり子とり⁷⁾ 4人

③縄跳び 3人

④かくれんぼ 2人

⑤走り高跳び 1人

日本人にも馴染み深い素朴な遊戯を楽しんでおり、大自然の中で元気に飛び跳ねている様子が伝わってくる。この年齢の子どもとして、余暇時間の過ごし方はきわめて健康的であるといえよう。

質問17は留守児童である自分に対する援助のニーズについて聞くものである。親の不在という現実を、子どもたちはありのまま受け止めてはいるが、設問10で明らかなおろ、寂しさを感じているのは事実である。では社会による何らかの援助の必要性を認識しているのだろうか。「必要」が11人、「不要」が1人、「無回答」が2人であった。「必要」と回答した子どもが11人と多かった。具体的にどんな援助かを聞く欄には、ただ「助け」と入れた子ども9人、「支援」と答えた者が1人、特別な記載なしが1人あった。これも子どもには難しい設問であるため筆者や校長先生が説明を行ったが、その前後に校長先生の考えが反映した可能性も否めない。参与観察者であり外国人である筆者もまた、学校にとって何らかの援助を期待できる存在だからである。

以上の結果を総括すると、今回の山岳地小学校における調査は少数の子どもたちを対象にしたものであったが、子どもたちの生活状況や夢を把握することができた。



図3 山岳地の幼稚園・小学校複合校にて



図7 村の小学校に通う女の子（ホームステイ先周辺で）



図4 小学校クラスの様子



図5 幼稚園クラスの授業風景



図6 1階の幼稚園クラスには犬も遊びに来る

これを足掛かりに次回調査においては対象を数名に絞ったうえで個別の家庭訪問による聞き取り調査を実施し、両親の出稼ぎ状況や本人の就学状況を把握する予定である。

4. 外来建設者受け入れ都市の就学支援について

4-1 第2次沿海都市調査

2011年8月6日～20日にかけて、筆者は中国沿海都市部における2回目のフィールドワークを実施するために訪中した。調査地は前回同様、浙江省義烏市である。今次調査の主要目的は、(長期・短期を問わず)出稼ぎに行く親に連れられて都市にやってきた子どもたちが受け入れ側である都市からどのように処遇されているのか把握することである。その方法は主に義烏市図書館において地元新聞を中心に資料収集を行うことと、前回同様、小商品市場及び人材市場を中心として視察を行い、外来建設者の生の声を聴くことであった。前者にあつては2011年に新築オープンした義烏市ご自慢の社会教育施設であり、広い間取りと最新鋭の設備が話題となっていた。館内には様々な部屋やコーナーがあり、その多機能



図8 義烏市図書館の外観

ぶりに驚かされたが、交通の便が悪く、夏休みだというのに利用者は少なかった。(図8参照)

さて、当初の推測は、この数年来、義烏市における外来建設者は、子女教育の面でも優遇され改善されつつあるのではないかというものであった。その理由は、数年前より沿海都市の工場を中心に「民工荒」と呼ばれる人手不足が生じ、人材を確保するために出稼ぎ労働者の賃金や労働条件改善の動きが沿海都市に広がっているからである。

4-2 外来建設者の子どもをどのようにケアするか

外来建設者の子どもたちを受け入れている学校には二種類ある。一つは公立の学校であり、もう一つは民間経営(私立)の「民工子弟学校」である。一般的に、前者に比べて後者は教育環境が劣るケースが多い。

さて、管見の限り義烏市が外来建設者の子どもに対する優遇やケアを本格的に開始したのは2006年からである。まず市政府が流動人口の子女の就学を義烏市民と同等にした。具体的には、義烏市内の義務教育段階の学校で学んでいる、条件にかなう他市・県籍の労働者や経営者の子どもの雑費、教科書代、ワークブック代を免除したのである⁸⁾。

また2008年には市の教育局が一对一の援助プランを制定・実施している。これは公立学校13校と民工子弟学校15校を縁組みし、公立学校側が民工子弟学校に協力員を派遣、学校の教学面および安全面の指導を行うものである。より重要なのは、これにより民工子弟学校を義烏市の教育管理および教育指導体制に組み入れ、教育の質を向上させることができたことである⁹⁾。

その後、2009年2月には市教育局から「外来建設者子女の義務教育政策を一層進めることにかんする意見」¹⁰⁾が発出されることになる。これは省政府がすでに発布した同名の政策文書を受け、義烏の実際状況を反映したうえで出されたものである。ここで内容をすべて訳出して検証することはできないが、要約すれば、子どもが出稼ぎの親と共に義烏市にやって来て居住するとき、一定の条件に合致する場合、当地の公立小中学校に入学を許可するというものであり、その実現のために各学校は最大限の努力と準備をし、関連行政機関はサポート態勢を強化しなければならないというものである。

ただし、その申請に際して必要とされる書類および条件が下記の通り大変に多い点が問題であった。(1) その父母あるいは法定監護者の身分証明書および原本、(2) その父母あるいは法定監護者の臨時居住1年以上の臨時居住証原本およびコピー、(3) その家庭の戸籍簿原本およびコピー、(4) その父母の労働契約書ある

いは商工許可書の原本およびコピー、(5) 養老保険を1年間納入したという証明書の原本およびコピー、(6) その父母が計画生育政策に違反していないという証明書の原本およびコピー(現居住地の区役所・町内会事務所または鎮政府の計画生育部門が発行)および行政拘留以上の処罰記録がないという証明書(限居住地の派出所が発行)ならびに当該年度の「流動人口結婚生育証明」を所持していること、(7) 固定住所の証明書(不動産証明書あるいは家屋賃貸契約書)の原本およびコピー、(8) 子どものこれまでの修業年数の証明資料(最初の学年の第一学期に戸籍所在地の鎮・町内会事務所のために発行する義務教育入学通知書)。毎日忙しく仕事をしている農村出身者が、これら資料を周到に準備する手間と困難は相当なものである。そればかりか、ここに記されている条件から、「流動人口」とみなされる外来建設者のなかでも模範的な保護者を、そしてその子どもを選別しようという当局の意図がみえるだろう。

しかし、2010年5月に義烏市教育局が発出した「義烏市公立小学・中学の外来建設者の子女受け入れ公告」¹¹⁾をみると、上記の条件がやや緩和されていることがわかる。その変更点とは、「外来建設者子女の戸籍所在地に子どもを監護する環境がないこと」「父母あるいはその他の法定監護者がすでに浙江省の居住証(あるいは臨時居住証)を有している外来建設者の直系子女」という二つの条件にかなう限り、前述の(1)(2)(3)及び(8)の書類を提出すればよいというものである。

こうして受け入れ学校は条件に適合する外来建設者の子どもに対して転学連絡票を作成し、時間内に手続きを行う。最寄りの学校は、受け入れ定員に余裕のある場合には、等しく子どもを受け入れなければならない。受け入れる余裕がない場合は、居住地の「中心学校」を紹介して申請・入学する。各中心学校は学校配置と新入生の入学状況を考慮して調整を行い、管轄する公立学校へ入学させるのである。すべての公立小中学校は条件にかなう外来建設者の子どもを受け入れる責任と義務を負い、定員に余裕がある場合には受け入れを拒否することができない。以上により入学した外来建設者の子どもに対しては、義烏の子どもと同様に省が一律に規定する義務教育無償政策を享受できるほか、条件にかなう貧困家庭の子どもは公的学資援助の対象とする。

他にも注目すべきアイデアがある。それは公立小中学校が外来建設者の子どもを積極的に受け入れるようにするための方策である。ひとつはとくに新入生の確保に苦勞する学校に対して外来建設者の子どもを受け入れさせること。ふたつには、その実績を学校や校長の審査・

賞罰および教員や職員の奨励金・教師の定員構成等に反映させるようにしたことである。この背景には、一人っ子政策が比較的徹底している都市部の少子化によって、新入生確保に苦しむ学校が増えている現状がある。そのような学校に対して外来建設者の子どもたちを積極的に受け入れるように指導しているのである。以上のような受け入れ拡充の取り組みに義烏市は毎年1億元以上の予算を計上している。¹²⁾

我が国では子どもや保護者の当然の権利である現居住地における教育への権利が、これまで中国では戸籍制度の壁に阻まれて実現できなかったのである。最近になり改善の機運が生じたことは、子どもの最善の利益保障の見地から意義深く、評価できよう。

4-3 課外活動——「歓楽暑假班」(ワクワク夏休みクラス)の取り組み

さて、次の写真(図9)を参照してほしい。巨大商品市場の広いロビーで遊ぶ子どもたちを撮影したものである。よく見ると子どもたちだけではなく、大人(おばあちゃんか保母さんであることが多い)が傍らで見守っている。外来者を中心に人の出入りが激しい市場であるため、セキュリティを考慮しているのである。



図9 「義烏小商品城」のロビーにて

夏休み期間中、このように外来建設者の子どもたちは、留守児童であるか帯同児童であるかを問わず、親元でひと夏を過ごすわけだが、平日は親も仕事があるため、職場付近で過ごすことが多いのだ。子どもたちにとって長期休業時の過ごし方も大切である。異郷で懸命に働く忙しい外来建設者の子どもたちは放任されがちであり、生活のリズムは崩れ、ゲームやインターネット等に嵌りやすいだけでなく、子どもたちに目を付ける悪い大人たちによる犯罪の犠牲にもなりやすい。つまり学校の長期休暇は都市戸籍を持つ豊かな家庭と農村児童の間に格差が生じる季節でもあるのだ。そこで夏休みなどには外来建

設者に連れられて都市で生活する子どもたち(あるいは夏休みを利用して親に会いに来た子どもたち)のために課外特別クラスが企画されることになる。

義烏市における外来建設者子女に対する課外教育活動として注目されるのが、「ワクワク夏休みクラス」の取り組みである。これは市民のボランティアが中心となる手作りの色彩が強いイベントで、数年前から行われているものである。報道記事に基づき記述しよう^{13) 14)}。2011年度は市内外から延べ100名余りのボランティアが参加して行われている。ボランティアの主力は大学生で、浙江工商大学、浙江師範大学、浙江建設職業技術学院などの40名以上の社会実践隊員(ボランティア)が子どもたちの教師を務めた。そのおかげで、450名以上の外来建設者の子どもたちが無料の夏休みクラスに参加することができたのである。

この夏季クラスは20日間の長期に及んだが、期間中の昼食はすべて無料であった。この費用は篤志家の寄付によって賄われたのである。期間中には講座がいくつも開催され、市の消防、電力、衛生・救急等、部門の職員が自ら現場に赴き、子どもたちに安全知識のレクチャーを行った。活動の中では、社会実践隊の学生がボランティアで子どもを教える苦勞を考慮し、多くの市民ボランティアが朝の食糧調達や朝食提供を含む裏方の仕事を買って出たのである。

70過ぎの退職教師である呉士珍^{ウーシーチェン}氏は毎日学校に通って授業をするだけでなく、生徒に与える賞品をポケットマネーで購入した。また浙江師範大学の学生たちは夜に露店を出して得た利益で子どもたちのために文房具など学習用品を購入した。義烏小商品城青年商人促進会の会長である駱勁松^{ルオジンソン}氏は、会員を動員して、活動に参加した学生にシルクの掛布団を差し入れた。またワクワク夏休みクラスの子どものためには毛糸の玩具などのプレゼントを贈った。

愛心公社の責任者である趙雲峰^{チヤオユンフォン}氏は述べている。「20日以上もの間、これら大学生のボランティアたちは、夜はゴザを敷き、暑い日もエアコンもなく、扇風機だけで凌いだ。彼らは日中子どもの面倒を見てやり、夜は露店を開かねばならぬ者もいた。子どものために修了式を開くときも、誰一人として疲れたと愚痴をこぼさなかった。彼らこそ最も苦勞した、まさに手本となる人たちのです。」と。

もう一つ注目すべきことに、「心理カウンセリング」の時間が設置されていることがある。農村から商業都市に出てきて、環境の変化に適応できず悩む子どもたちは多い。やさしい大学生による子どもたちのカウンセリン

グは外来建設者の子どもたちの心に思いを致す重要な取り組みであると評価できる。

以上のように、義烏市においてはボランティアが主体となって外来建設者の子どもたちをサポートする取り組みが行われていることが判明した。次回はぜひこの開催期間に合わせてフィールドワークを実施し、運営関係者およびボランティア、またそこに参加する子どもたちに話を聞いていきたい。この取り組みが子どもたちをどのように成長させたのか、またサポートする側がどのように自己形成できたのかを考察することが次なる目標となるだろう。

おわりに

以上、中国における都市と農村の教育格差の問題に関連し、中国政府や社会が留守児童の夢の実現に向けてどのようにサポートしていこうとしているのかを述べてきた。まず第2節では、中央の策定した発展計画の検証を通じて、全体的な国民の高学歴化と実務能力の向上が目指されていることが明白であった。留守児童や外来建設者もその主要な対象なのである。つぎに第3節では、湖南省農村における第二回目のフィールドワーク時に実施した聞き取り調査に基づき、留守児童の生活背景と夢を描き出した。ここに表れた子どもの夢を実現するためには、まず親によるきめ細やかな監護が必要である。そのためには子どもが親と出来得る限り一緒に生活できるようにすることが良策だろう。政府・民間を問わず関係団体がその実現に向けて最大限サポートすることが肝要である。その取り組みの一例として、第4節では、農村労働力を必要とする側である沿海都市が、外来建設者の子どもをどのように処遇しようとしているのかを明らかにした。外来建設者の親に連れられ市内で同居する子どもたちを公立小中学校で積極的に受け入れ、教学の質を保証し、費用面での負担を軽減しようとの義務教育政策は、確かに都市と農村の教育格差を縮めるきっかけになるだろう。また、市民ボランティア主体の農村児童向け特別講座も有効であり、優れた取り組みである。ただし、それが子どもの権利条約にあるような「子どもの権利擁護」という理念に本質的に基づいたものであるのか、そうではなくて当該地域の経済発展のための福利厚生政策なのかは慎重に見ていかなくてはなるまい。継続的なフィールド調査が必要である。

謝辞

本稿は文部科学省科学研究費補助金を受けた研究テーマ「中国農村における留守児童と教育格差に関する研究」（挑戦的萌芽研究：21653095）の取り組みの一つである中国内陸部農村及び沿海都市へのフィールドワークをもとに執筆したものである。そもそもこのフィールドワークは現地協力者の貢献がなければ実現不可能であった。関係各位に心から御礼申し上げる。（諸般の事情を考慮し本稿において実名を記載するのを差し控える）

註

本稿における「註」は、日本社会教育学会の記載形式にのっとっている。

- 1) 登坂学「中国の留守児童と出稼ぎ労働者-フィールドワーク1年目の総括」『九州保健福祉大学研究紀要』第12号、2011年3月、57-68頁。
- 2) 本名：楊智慧、河南省項城市出身の12歳。インターネットや中央・地方メディアを中心に表現活動をするギター弾き語りの小学生である。
- 3) 「酷6.com」をはじめとする中国の動画当サイトで本人投稿のビデオクリップを視聴することができる。
http://v.ku6.com/show/8Av4sg2mFZjbyGI_.html?s=0 (2011年9月24日アクセス)
- 4) 「児童の権利に関する条約」外務省ウェブサイト、
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/jido/zenbun.html> (2011年9月29日アクセス)
- 5) 「家中長期教育改革和发展规划纲要(2010-2020年)」中華人民共和国人民政府ウェブサイト、
http://www.gov.cn/jrzg/2010-07/29/content_1667143.htm (2011年8月21日アクセス)
- 6) 同上。
- 7) 「子をとり子とり」とは子どもの遊戯の一つである。一人が鬼、一人が親となり、親の後ろには子が列を作って連なる。鬼は最後の子を捕まえようとし、親は両手を広げてそれを防ぐ。一番後ろの子が捕まった時はその子が鬼となる。わが国の子どもたちもこの遊びをするが、地域によってさまざまな名称で呼ばれている。
- 8) 「义乌大力推进中小学改扩建设」金华新闻网、2010年3月18日
http://www.jhnews.com.cn/zzxb/2010-03/18/content_954748.htm (2011年9月27日アクセス)
- 9) 「外来建設者子女入学享受“同城待遇”」2011年9月6日、浙江在线、

- <http://edu.zjol.com.cn/05edu/system/2011/09/06/017823908.shtml> (2011年9月27日アクセス)
- 10) 义政办发(2009)19号「关于进一步做好外来建设者子女义务教育工作的意见」、義烏市政府ウェブサイト、http://www.yw.gov.cn/zwb/zwgk/zcfg/szfgw/200903/t20090306_172034.html (2011年9月28日アクセス)
- 11) 义乌市教育局「义乌市公办小学、初中接受外来建设者子女入学公告」、2010年5月24日、義烏市教育局ウェブサイト、http://ywec.net/Res_Show.aspx?ResID=31113 (2011年9月29日アクセス))
- 12) 「义乌出台教育惠民政策聚焦教育公平」浙江省教育厅「2010年3月18日
<http://www.zjedu.gov.cn/gb/articles/2010-03-31/news20100331112139.html> (2011年9月27日アクセス)
- 13) 「欢乐暑假班下帷幕 450 余名外来建设者子女享受“免费午餐”」义乌商报、2011年8月3日。
- 14) 「关爱外来建设者子女夏令营启动」義烏市政府ウェブサイト、
http://www.yiwu.gov.cn/zwb/zwgk/zwdt/tpxx/201007/t20100714_277032.html